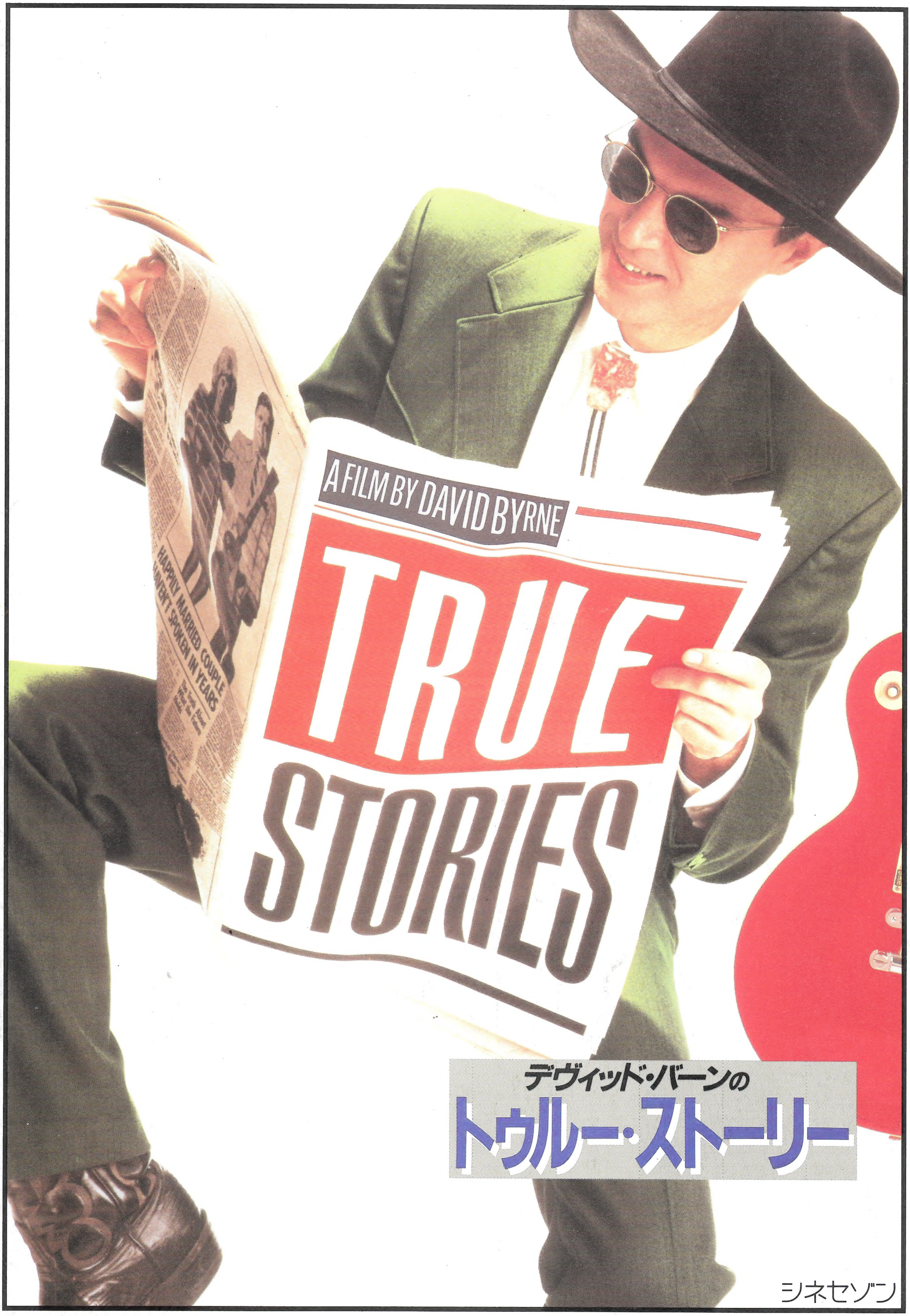


デヴィッド・バーンの
トゥルー・ストーリー

シネセゾン



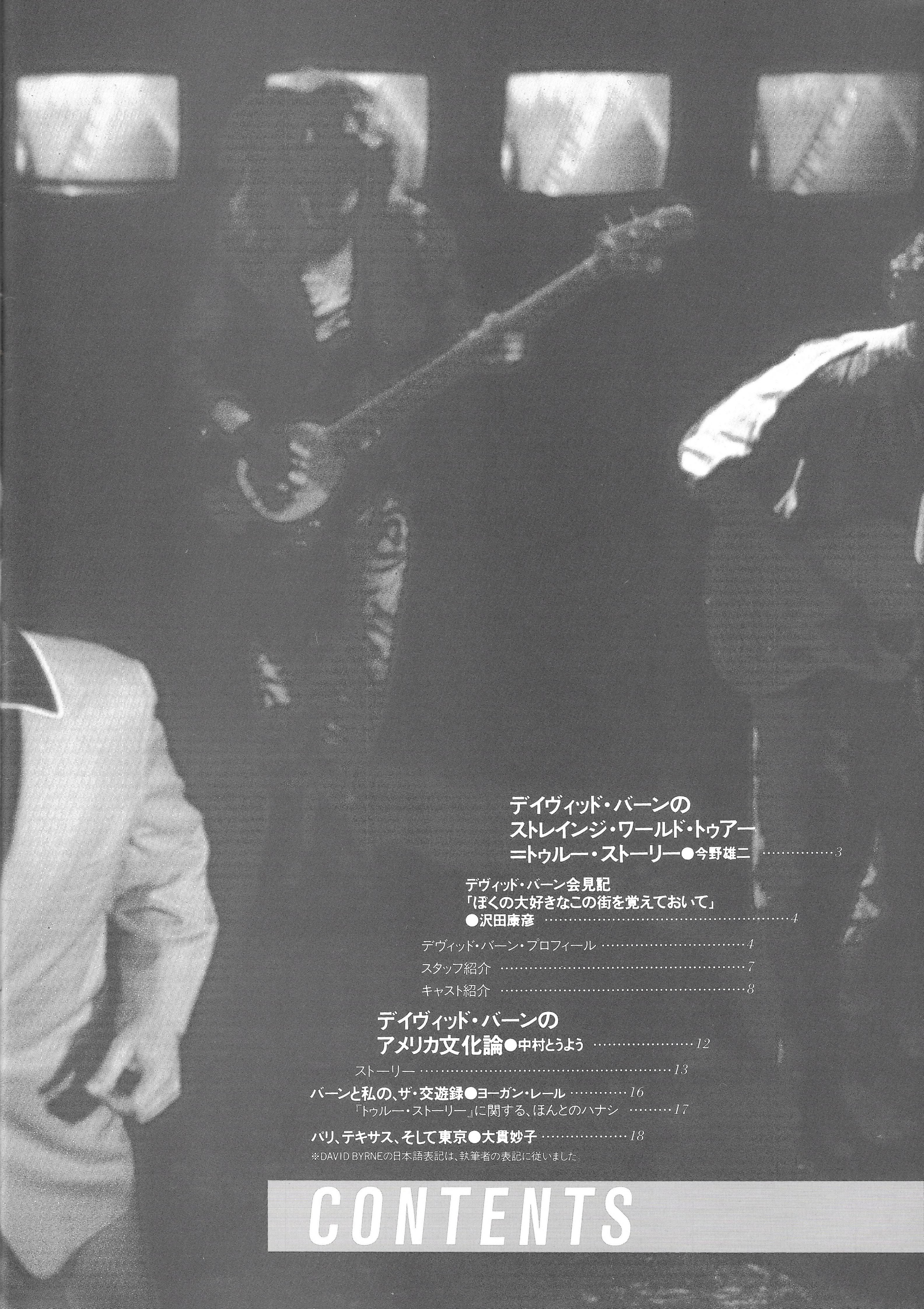
STAFF

監督・脚本/デヴィッド・バーン●Directed & Written by/DAVID BYRNE
製作総指揮/エドワード・R・プレスマン●Executive Producer/EDWARD R. PRESSMAN
製作/ゲイリー・カーファースト●Produced by/GARY KURFIRST
共同製作/カレン・マーフィ●Co-Producer/KAREN MURPHY
共同脚本/ベス・ヘンリー●Written by/BETH HENLEY
ステファン・トボロウスキー STEPHEN TOBOLOWSKY
撮影監督/エド・ラッチマン●Director of Photography/ED LACHMAN
音楽/トーキング・ヘッズ●Original Music by/TALKING HEADS
編集/キャロライン・ビッガースタッフ●Film Editor/CAROLINE BIGGERSTAFF
美術/バーバラ・リング●Production Designer/BARBARA LING
配役監督/ヴィッキー・トーマス●Casting Director/VICTORIA THOMAS
衣装デザイン/エリザベス・マクブリッジ●Costume Designer/ELIZABETH McBRIDGE
アデル・ラッツ ADELLE LUTZ

CAST

ナレーター/デヴィッド・バーン●Narrator/DAVID BYRNE
ルイス・ファイン/ジョン・グッドマン●Louis Fyne/JOHN GOODMAN
ケイ・カルヴァー/アニー・マッケンロー●Kay Culver/ANNE McENROE
アール・カルヴァー/スポルディング・グレイ●Earl Culver/SPALDING GRAY
怠け者の女/スウォジー・カーツ●Lazy Woman/SWOOSIE KURTZ
うそつき女/ジョー・ハーヴェイ・アレン●Lying Woman/JO HARVEY ALLEN
ミスター・タッカー/ポップス・ステイプル●Mr. Tucker/ROEBUCK "POPS" STAPLES
かわいい女/アレックス・エリアス●Cute Woman/ALIX ELIAS
ラモン/ティト・ラリーバ●Ramon/TITO LARRIVA
コンピュータ男/マシュー・ポセイ●Computer Guy/MATTHEW POSEY
牧師/ジョン・インクル●Preacher/JOHN INGLE

●1986年/アメリカ映画/カラー/上映時間1時間29分●配給/ワーナー・ブラザース映画

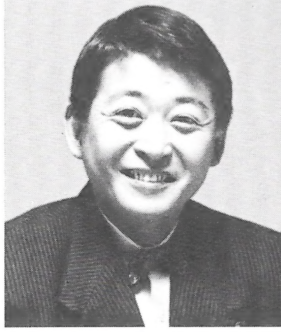


※DAVID BYRNEの日本語表記は、執筆者の表記に従いました。

CONTENTS


TRUE
STORIES

デイヴィッド・バーンのストレインジ・ワールド・トゥアー=トゥルー・ストーリー



今野雄二(音楽評論家)

実はデイヴィッド・バーンほど自分が普通の人間に見られることに恐れおののいている男は他にいない、という。そう証言したのはティナ・ウェイアスというトーキング・ヘッズのベーシストである。

そんなデイヴィッド・バーンであるから、いわゆる普通でない人々に興味を持ち、彼らを通してこの現実の世界の真実の一断面を描き出してみようと思いたったのは、ごく当然の成行きといえる。そこで彼は我々をテキサスにあるというヴァージルという町へ案内してくれることになる。

ヴァージルの変人奇人たちよりも更に普通ではない筈のデイヴィッド・バーンにとって、その町はあくまでも客観的に眺められなくてはいけないのであるから、ガイド役を務める彼共々、我々は画面に映し出されたヴァージルに、文字通りスクリーンを割って入っていくことになる。その後はカウボーイ・ファッションを身につけたデイヴィッド・バーンといっしょに赤いコンヴァーティブルに乗って、ヴァージルの中心をめざせばいい。

いまだにイギリスのパスポートで世界を飛びまわるデイヴィッド・バーン同様に、我々もヴァージルの町では異邦人(エイリアン)でしかないのだが、様々の人々と出会ううちに、しかし、ヴァージルが世界中のどこにでもある町、もしかすると我々自身の町であるかもしれないと思うようになってくるころが、このストレインジ・ワールド・トゥアーの不思議な魅力の秘密である。

まったくよく似た赤いコンヴァーティブルに乗った主人公が、逆に主観的立場から、見た目は平凡でありふれた故郷の町の、異常な暗黒世界にひきずり込まれていく『ブルー・ベルベット』の場合も同様である。デイヴィッド・バーンそっくりのチキン・ウォークを披露したりする主人公が登場するデイヴィッド・リンチのその映画も、『トゥルー・ストーリー』同様にラスト・シーンがオープニング・シーンに結びついて、一種のエンドレス・フィルムの構造になっている。そしてランバートンという町が、ヴァージル同様に我々の町のことであるかも知れないと思わせる点で、同じ効果をもたらしている。

自由も正義もいらないけれど愛する人だけは欲しい、と「ピープル・ライク・アス」を歌う人の良い太った中年男(ジョン・グッドマン)を筆頭に、夫(スポールディング・グレイ)とは3年間も直接口をきいていない代りにファッション・ショーの司会者としてうっとりとした表情で「ドリーム・オペレイター」を歌う主婦(アニー・マッケンロー)や、世界一のなまけ者でベッドから一歩も出ない金持ち女(スウォージー・カーツ)の召使いを務めるかたわら、ホワイト・マジックにこって「パパ・レグバ」を歌う黒人(ローバック・〝ポップス〟・ステイプルズ)などを通して、この映画ではデイヴィッド・バーンのソングライターとしての才能も遺憾なく発揮されている。

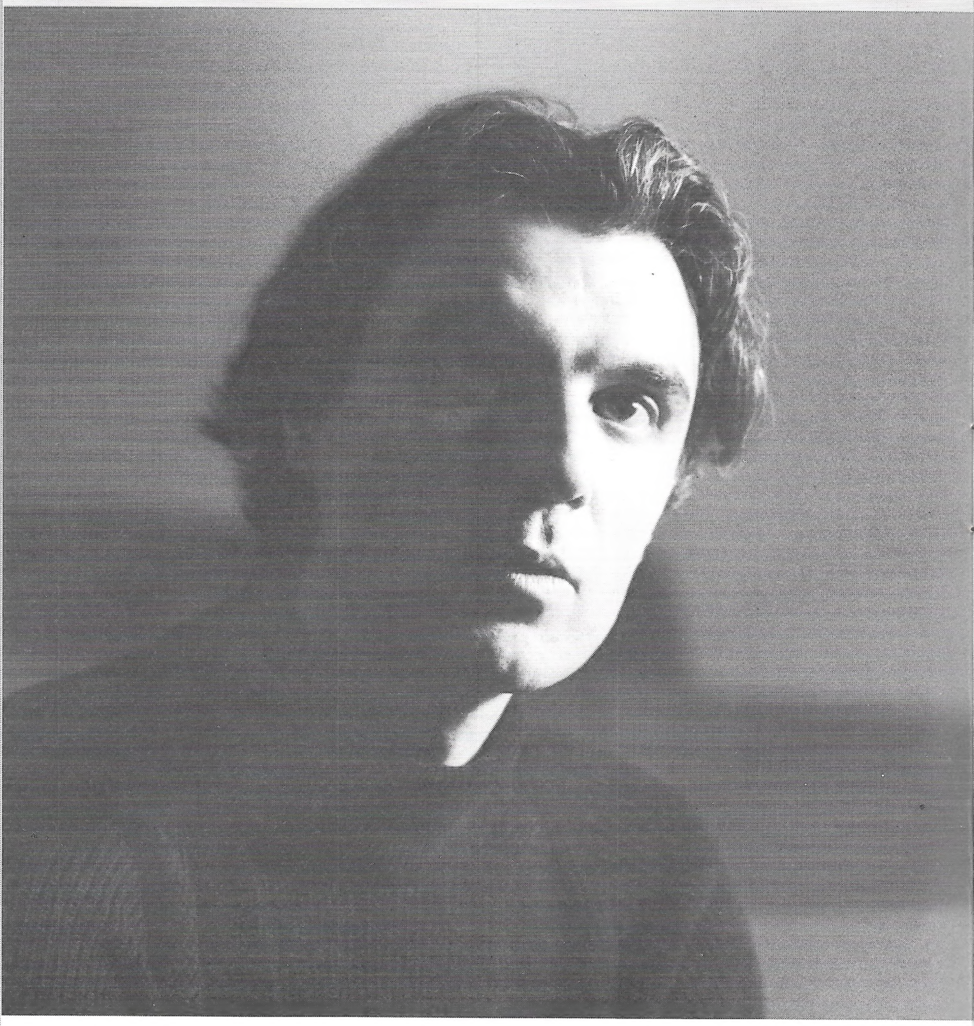
トーキング・ヘッズ本来の演奏は、ヴァージルの町民が集うバーのカラ・オケならぬアテ・ブリのシーンで「ワイルド・ワイルド・ライフ」が、またTVのCFとして「ラブ・フォー・セール」、そしてエンディング・テーマとして「シティ・オブ・ドリームズ」が紹介される。それらのヘッズ・オリジナルともいうべき演奏にも増して、劇中のキャストたちによって歌われる曲の数々の方がよほど説得力を感じさせるところが、この映画の優れているもうひとつの理由でもある。

映画『ロンリー・ハーツ』の原作戯曲の作者でもあるベス・ヘンリーらがデイヴィッド・バーンに協力して書いた脚本の良さを、前述の歌曲の数々が更に補って、各人物の性格をより一層好ましいものにしている。とりわけジョン・グッドマンが「ピープル・ライク・アス」を歌うクライマックス・シーンにあふれる幸福感は、この映画のもっともすばらしい贈りもの、といっていい。

この愛すべき、しかも変ったタイプの映画の作者として、改めてデイヴィッド・バーンの才能に注目した〈タイム〉誌は、昨年の秋とうとう彼をカヴァ・ストーリーにとりあげた。万能の天才という意味か、デイヴィッド・バーンに〈ロック界から出現したルネッサンス・マン〉なる称号を同誌は捧げている。

デイヴィッド・バーンは確かに普通の人ではない。

※撮影:青野 正



A・CAPPELLA

「ぼくらの大好きな この街を覚えておいて」

デヴィッド・バーン会見記●沢田康彦(映画ジャーナリスト)

インタビューの約束をした午後7時に、デヴィッド・バーンはごめんごめんと40分遅れて来た。その理由は単純で、要するに新宿から京橋まで、地下鉄をひとりで乗り継いで来るのに難航したのである。途中で彼は律儀に3度も電話を入れて来た。3度目の電話では**「もう銀座まで到達しているのだけど」**と、ずいぶん苛立たしげに言った。赤い丸ノ内線の中で難しい顔をして路線図を見上げていたに違いないバーン、赤坂見附の乗り換えでラッシュに見舞われてウロウロしていたに違いないバーンが、映画『トゥルー・ストーリー』のナレーター役のイメージと重なって、ぼくは

PROFILE 真のルネッサンス人、デヴィッド・バーン。

1952年、スコットランドに生まれ、7歳の時ボルチモアに移った。ハーバード大学で建築を専攻するが飽きたらず、ロードアイランド・デザイン学校で美術を学び、まず撮影、演技、ビデオの分野で仕事をした。

1975年初めに、学校の仲間クリス・フランツとクリスのガールフレンド、ティナ・ウェイマスらとバンドを結成。ニューヨークに移り、ジェリー・ハリソンを加え、同年6月にCBGBというニュー・ウェイブ・クラブで"トーキング・ヘッズ"としてデビューを飾る。'77年には、ファースト・アルバム「TALKING HEADS: 77」をリリースし、注目を集めた。

しかしバーンは、通り一遍の活動では満足できず、トーキング・ヘッズが独立して活躍できる舞台を探していた。そして、'81年、振付師トゥワイラ・サープの80分間のダンス"Catherine Wheel"のためにオリジナル曲を作曲し、演奏した。'84年には、前衛脚本家ロバート・ウィルソンと組み、ウィルソンの叙事詩的オペラ"The Civil War"(市民戦争)の中の小品"The Knee Play"のためのスコアを書いた。またソロとしては、ブライアン・イーノと共同プロデュースしたアルバム"My Life in The Bush of Ghosts"を発表した。

さらに、これらと別にPBSのシリーズ番組"Alive From Off Center"では、テーマ音楽を

何だかとっても嬉しい気分になってしまった。確かにこの男は、映画のラストでのセリフ通り、新たに訪れた土地を仔細に観察して回る特徴があるらしい。そのセリフとはこうだ。

「忘れることって好きだな……。どこかの土地を初めて訪ねる時、ぼくはあらゆるものを見て回る。紙の色、空、人の歩き方、ドアノブや、様々なディテールを。それからしばらくそこにいると、ぼくにはもう何にも気のつくものがなくなっている。そこがどんなふうだったか忘れてしまえることこそが、それを思い出せるということなんだ。だから、多分ぼくには忘れることと思い出すこととは同一なんだよ」

バーンを見るたびに鳥を連想してしまう。鷲や鷹というよりは、鴉。気の向くまま何処でもつついて回る雑食性の鳥のイメージだ。鳥瞰図というのは大空からのパノラマを意味する言葉だが、バーン的鳥瞰図とは土地のディテールをトリビアルにつついて回ったあとに出来上がる変てこなマップである。彼は、大きな目をくりくりさせて観察する。批評せず、ただ観察する。映画ではその対象はテキサスだったが、今その目は日本にも向けられているらしい。

「日本は大好きな国だよ。うまく言えないんだけれど、ぼくはこの国の持つ全体の雰囲気が好きだ。映画も劇場も、それから人が話している雰囲気というものにも魅かれる。西洋とはまるで違う何か。使っている技術は、たとえば写真や映画なんかももともとは西洋のものなのに、作られ醸し出される雰囲気は全くこの地独特のものなんだね」

——日本映画をよく見るらしいですね。

「うん、とても好きなんだ。今の日本の若手監督たちは実にいいと思っている。『夢見るように眠りたい』の林海象、『家族ゲーム』の森田芳光、『逆噴射家族』の石井聰亙、『コミック雑誌なんかいらない』とか……ニューヨークでは『台風クラブ』なんかをやっていたよ。とっても面白かった。相米慎二っていうの？彼の『ラブ・ホテル』はビデオで見た。ナイス・ムービーだ」

——林海象氏から少し話を聞いたんだけど、あなたの企画していた映画が駄目になってしまったんですって？

「そう。日本には、映画を撮りに来たんだ。『アリア』という英米合作の映画で、ぼくの他にはゴダールとかロバート・アルトマンとかニコラス・ローグ、ケン・ラッセルなど10人の監督がそれぞれ10分の映画を撮って、全体で1本のオペラ映画にするという企画だった。ぼくは前々から日本の映画を撮りたいと思っていたから、その打ち合わせで来たんだ。林海象とはニューヨーク映画祭で知り合って以来の仲で、今回の企画のいい助言者になってくれている。実は1月25日から越後湯沢でクランク・インの予定だったんだよ」

——どんな内容だったのですか？

「男と女の戦いを主軸にした自殺劇で、舞台は現代だが、スタイルはチャンバラ映画風になるはずだった。ただ多少血が出すぎるから、製作側からノーと言われてしまった。上映規制に引っかかってしまうらしい」

後日、林海象氏を訪ね、バーンの描いた絵コンテを見せてもらった。それは、雪深い北国の日本家屋を舞台とした結婚式の映画だった。オペラの音楽とともに参列者たちはくる



作曲し、いくつかのシーンにも登場している。

映像にも積極的にアプローチし、トーキング・ヘッズ7本のミュージックビデオを監督・プロデュースし、そのうちの数本は現代美術館の永久保存コレクションになっている。'85年にはMTVからビデオ・バンガード賞(先駆的作品賞)を贈られた。

もちろん映画にも触手をのばし、彼が企画・主演した、トーキング・ヘッズのコンサート・ドキュメント映画『ストップ・メイキング・センス』は国内映画批評家協会の'84年度最優秀ドキュメンタリー映画賞を受賞した。

そして、この『トゥルー・ストーリー』だ。バーンは子供の頃、趣味で映画や写真を撮っていたが、これらのいくつかがこの作品の材料として使われている。この映画で彼は平凡さに固執しているが、それをこう語っている。「良い状態でいるために、立派なスタイルをとる必要はないさ。時には、一番シンプルな物事のほうで美しいことだってあるんだ」

彼は、この映画にナレーターとして登場する。ヴァージルの孤独なカウボーイという役を、陰のある、平凡な、少しトーンを変えた感じで演じる。彼はシーンに登場したり引っこんだり、まるで万能のエイリアンがヴァージルという町にやってきたかのように、時にはカメラに向かって直接語りかけ、事件を直接コメントする。しかしバーンは役者よりも、監督のほうが好きだと漏らしている。次作が楽しみな監督の登場と言えるだろう。

くると踊りながら、１人ずつ刀に切られ血にまみれて死んでいく、美しく凄惨な無言劇だった。美術学校出身のバーンは、約60近いカットからなるこの映画を１カットずつ、極めて丁寧に神経質に描きこんでいた。「何度も会って打ち合わせをしたよ」と林氏。「色んな古いチャンバラ映画をビデオで見せてあげた。興味深げにじっと見ていたけど、バーンの目にはどんな風に映っていたんだろう？」

林氏からのこんな面白い話も聞いた。『アリア』の話がぽしゃった日、バーンを励ます会が即席に開かれた。いつもはそんなに酔わないバーンもこの日はさすがに荒れ気味で、何杯も酒をあおっていたという。みんなで繰り出した新宿のカラオケ・スナックでは、「朝日のあたる家」なんかを歌った。スナックのおねえちゃんたちは、デヴィッド・バーンが何者かを知らず、たまたま別に飲みに来ていた利重剛にきゃーきゃーとサインをねだっていたらしい。バーンがシンガーだと聞くと、おねえちゃんたちは「ギター弾けるの」とか言って、無理に歌を歌わせた。彼はギター片手に「ワイルド・ワイルド・ライフ」を歌ったという（だが、おねえちゃんたちは、ほとんど何も聞いていなかったらしい）。

——映画のあなたは全く落ち着きのない様子でしたね。まっすぐな道なのに視線もハンドルを持つ手もひっきりなしに動いていて。

「もちろん演技だよ。あれは異文化に触れたばかりの男に現れた肉体的反応なんだ」

スコットランドに生まれ、幼い時両親とアメリカ東部に移った。**「両親はぼくをヨーロッパ的に育ててくれたように思う」**とバーン。だからテキサスも異郷の地なのだ、と。

——監督であり作者であり主演であるあなたの正体が時にわからなくなります。客観的だし主観的だし、大人のようで子供のようで、科学的だし時には芸術的だし、優しそうで時には実に皮肉っぽいし。

「どうもありがとう。それはこの映画への素敵な賛辞だね」

あなたは未来に対して楽観的？　悲観的？と聞いたら、**「いつも楽観的であるようにって思っているよ」**とバーンは答えてくれた。だが、例えばヴォネガットやアーヴィングの明るすぎる小説がかえってペシミズムを湛えているように、この映画を見ているとぼくは胸が痛む。先のアルバム「リトル・クリーチャーズ」に通底するようなテキサスの青い明るい空や、大ざっぱな建物、隊列を組んで「ヘイ・ナウ」を歌う子供たち、「ドリーム・オペレーター」を歌う女性、その他どこにでもいるような登場人物たちを見ているだけで、ぼくはなぜか泣けてしようがないのだ。

冒頭の音楽「シティ・オブ・ドリームズ」のトーキング・ヘッズ版の歌詞はこうだ。

「いま君たちが立っているここで/恐竜がダンスを踊った/インディアンが伝説を語った/そして時代は移り変わる/（略）ぼくたちは夢の街に住み/炎のハイウェイを走る/目覚めたらすべては消えているかも/ぼくらの大好きなこの街を覚えておくんだ/（略）南北戦争も/第一次も第二次大戦も終わった/もしぼくたちがともに愛しあえるというのならば/夢は実現するかもしれない/このコンクリートの下に/夢はなお息づいている/１億もの世代が/決して滅びぬ世界がある」

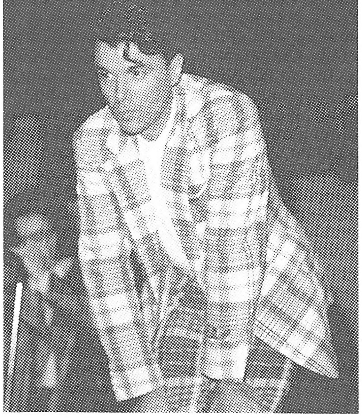
或いは彼はこう歌う。

「州間道路で眠るようなワイルド・ライフを送れ/金も時間も残らずつぎこんで/限りなくワイルドに突っ走れ」（「ワイルド・ワイルド・ライフ」）

デヴィッド・バーンは新しいぼくらの時代のジョン・レノンかもしれない。彼の歌う、時代の夢を組織してくれる「ドリーム・オペレーター」とは彼自身のことかもしれない、とぼくは思った。

（インタビューの詳細は雑誌「ブルータス」154号に掲載）





PERSONNEL

奇才バーンをサポートする、鬼才たち。

ベス・ヘンリー●共同脚本

ミシシッピ州ジャクソンに生まれ、南部メソディスト大学で演劇を学ぶ。イリノイ大学の大学院で一年をすごし、女優を志しロスアンジェルスに行くが機会に恵まれず、戯曲"Crime of the Heart"を書き始める。この作品はルイスヴィル・アクターズ・シアター後援の戯曲コンテストに入賞。七九年ニュー・アメリカン・プレイズ・フェスティバルの催しとして上演され大ヒットとなり、八一年にはピューリッツァ賞の最優秀アメリカ戯曲賞に輝いた。その後も、"The Miss Firecracker Contest" "The Wake of Jamey Foster" "The Debutante Ball" "Lukey Spot"などの作品を次々と発表し好評を博している。

エドワード・R・プレスマン
●製作総指揮

ニューヨークで生まれ、スタンフォード大学で哲学を学び、ロンドン経済大学の大学院に進んだ。その後、ポール・ウィリアムスの"The Revolutionary"をプロデュースし映画界にデビューする。彼はまだ発見されていない才能を見つけ、一緒に仕事をすることで実績を築いていきた。これまで手掛けてきた作品は『ファントム・オブ・パラダイス』『悪魔のシスター』『Uボート』『パラダイス・アレイ』など話題作揃いである。

ステファン・トボロウスキー
●共同脚本

テキサス州ダラスに生まれ、南部メソディスト大学に学ぶ。ベス・ヘンリーは大学時代からの仲間。彼は幾つもの顔を持ち、まず役者としてヘンリーの戯曲"The Miss Firecracker Contest" "The Wake of Jamey Foster"などで舞台の主役を務め、映画ではジョナサン・デムの "Swing Shifl"、『フィラデルフィア・エクスペリメント』などに主演している。演出、脚本も手掛け、ミュージシャンとしても活動。今回はデヴィッド・バーンの勧めで、この作品の脚本を担当することになった。

ゲイリー・カーファースト●製作

ブルックリン生まれの彼は、ホットトラフ大学に学び、コンサート・プロモーターとして仕事を始めた。ヤードバーズ、ザ・フー、ジミ・ヘンドリックス、クリームなどを、最初にニューヨーカーたちに紹介したのは彼だ。七七年にトーキング・ヘッズと出会い、そのマネージメントを引きうける。『ストップ・メイキング・センス』も彼がプロデュースした。現在はユーリズミックス、ボブ・ゲルドフなど多くのミュージシャンのほか、イアン・ランバート、テディー・バッファローの二人の若手監督をサポートしている。

エド・ラッチマン●撮影監督

ニュージャージー州モーリスタウンの映画館の息子として生まれる。大学を四つ変わり最終的にはオハイオ大学で絵画の学士号をとった。しかし、五二年にヴィトリオ・デシーカ監督のイタリアンネオリアリズム作品『ウンベルトロ』と出会い、絵画から映画の世界に進む。まず、ウェルナー・ヘルツォークにつきドキュメンタリー作品を手掛ける。八〇年頃まではゴダールの『パッション』など外国での仕事が多かったが、最近ではスーザン・サイデルマンの『スーザンを探して』など国内でも活躍している。またローリング・ストーンズ、エルビス・コステロなど多くのロック・ビデオも撮り、幅広い活動を続けている。

カレン・マーフィ●共同製作

サンフランシスコ・ステイツで美術の学位をとった後、ドキュメンタリー映画のスタッフたちと全米を回る。ロスアンジェルスでAFIの映画プロジェクトについて働きはじめ、その後『ゴーストバスターズ』のハロルド・ライムス、ボブ・ライナーらと仕事をするかたわら、テレビでも活躍。初の長編映画プロデュース作品は"This is Spinal Tap"という架空のロックバンドのパロディー・ドキュメンタリー。この映画は彼女の２本目の長編プロデュース作品である。

PERSONNEL



ジョン・グッドマン●ルイス・ファイン

セントルイスに育ち、サウスウエスト・ミズーリ州立大学で演劇を学ぶ。'75年ニューヨークへ移り、オフブロードウェイ、テレビ CM、地方の劇場に出演し、芸の幅を広げた。'83年に映画デビューを果たし、『マリアの恋人』などに登場した。'85年にはブロードウェイ・オリジナルキャストで上演された"Big River"で、酒好きの神父を演じドラマ・ディスク賞にノミネートされた。今後の作品は、ブレイク・エドワーズの"Blind Date"、コーエン兄弟の"Raising Arizona"などである。

アニー・マッケンロー●ケイ・カルヴァー

彼女は子供の頃から、祖父の持つコロラド州の田舎のナイトクラブで、ステージに立っていた。一七歳の時には、コロラドで芝居を演じ、演出し、劇場エージェントを雇っていたほどだ。演劇はサンフランシスコのアメリカン・コンセルヴァトリー・シアターと、コネチカット州ウォーターフォードのユージン・オニール・センターで学んだ。これまでマイケル・ケインとの共演作"The Hand"や『バトルトラック』など六本の映画に出演し、この映画が七本目の作品である。



クセ者たちを演じる、

スポルディング・グレイ●アール・カルヴァー

ロードアイランドのプロヴィデンスに生まれる。エマーソン大学で演劇と演出を学び、卒業後ヒューストンのアレーシアターで働く。'68年ニューヨークへ移り、実験的な演劇に取りくむ。'70年にはソーホー・ルネッサンスのパイオニアと呼ばれるリチャード・シェシュナーのグループに加わった。'85年にはグッゲンハイム助成金を獲得し、また監督・脚本・出演のひとり芝居"Swimming to Cambodia"でオビー賞を受賞した。彼はこれまでに11本のひとり芝居の脚本を書き、それは2冊の本に納められている。映画では『キリング・フィールド』などに出演している。





スウォージー・カーツ●怠け者の女

ロンドン音楽演劇芸術アカデミーを卒業後、コネチカット州ウォーターフィールドで開かれたユージン・オニール戯曲夏期ゼミナールに、五年にわたり参加した。まず舞台俳優として注目され、八一年に"The Fifth of July"のグウェン役で、トニー賞など三つの賞を獲得した。その後も、多くの賞に輝き、演技派女優として知られる。映画では『ガープの世界』の娼婦役、『ワイルド・キャット』のゴールディ・ホーンの妹役などを演じ、達者な演技を見せてくれた。

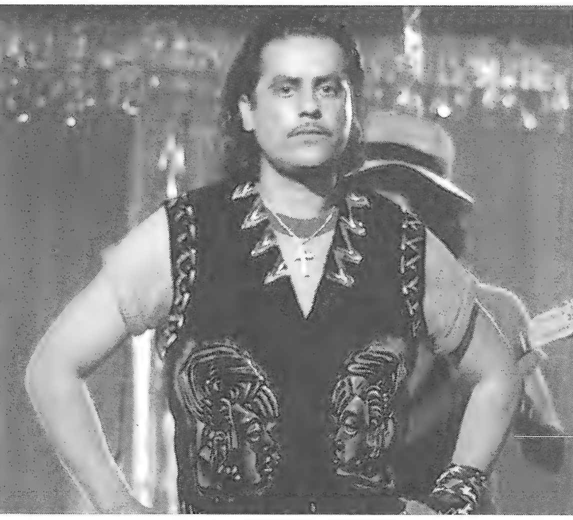
ジョー・ハーヴェイ・アレン●うそつき女

テキサス州ルボックに生まれ、女優になるまでにセールスウーマン、ラジオの DJ など様々な職につく。女優としての経歴は素晴しく、２つのアート奨学金を受け、また AVI 基金の最初の受領者でもある。'85年にはサンフランシスコ・アート・インスティテュートの学内寄宿アーティストとなり、40をこえる博物館や大学で、詩の朗読やレクチャーを行った。この作品は、彼女の映画デビュー作である。



アレックス・エリアス●かわいい女

ニューヨークのネイバーフッド・プレイハウスを卒業。15年以上にわたって、ブロードウェイ、オフブロードウェイ、ロスアンジェルスで活躍してきた。これまで"Key Exchange" "Rock and Roll High School"など、8本の映画に出演。テレビで数本のレギュラーを持ち、CM には数えきれないほど出演している。最近の舞台出演作は、オフブロードウェイで上演された"Modern Romance"で、彼女自身が執筆した作品である。



ティト・ラリヴァー●ラモン

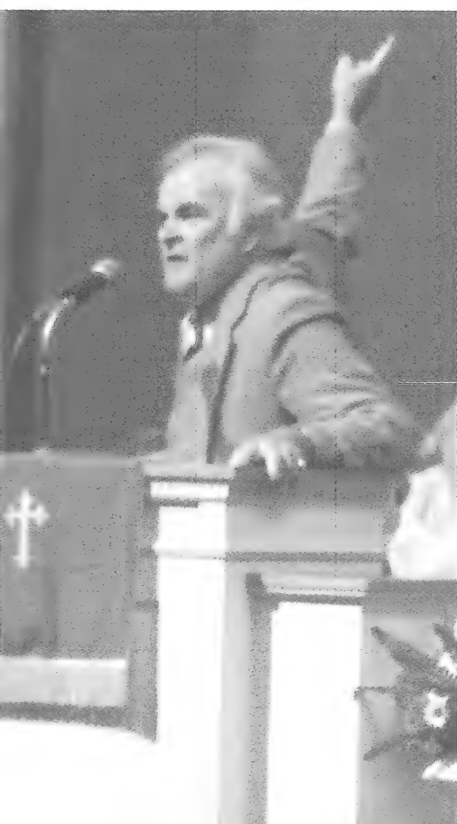
エル・パソで生まれ、七五年ロスアンジェルスに移り、俳優組合の舞台やミュージカルに出演。七七年には、バンド〝ザ・プラグルス〟を結成した。このバンドは、のちに〝クルザドス〟と名前を変え、全米のトップ一〇〇にチャートインするなど、ヒットを飛ばした。彼はメキシコの国立バレー・現代タンゴ・カンパニーのメンバーでもあり、パントマイムもこなす。最近はステファン・ハフステターとともに、ジョナサン・デム監督、ベス・ヘンリー脚本、デヴィッド・バーン主演の新作映画〝Survival Guides〟の曲を書いた。

くせ者たち。

ポップス・ステイプル●ミスター・タッカー

世界的に有名なゴスペル・グループ〝ステイプルス・シンガーズ〟のリーダーで80歳になる。このグループはこれまでに世界中で演奏活動を行い、40枚以上のレコードをリリースし、プラチナ・アルバム２枚とゴールド・シングルを獲得した。映画は２度目で、１度目はグループと一緒に『ラスト・ワルツ』でザ・バンドとともにスクリーンに登場した。バーンとの出会いは'83年で、トーキング・ヘッズの「スリーピー・ピープル」をグループが録音した時である。その後も、グループのレコーディングにバーンを招いたりし、音楽家としてバーンと強く結びついている。



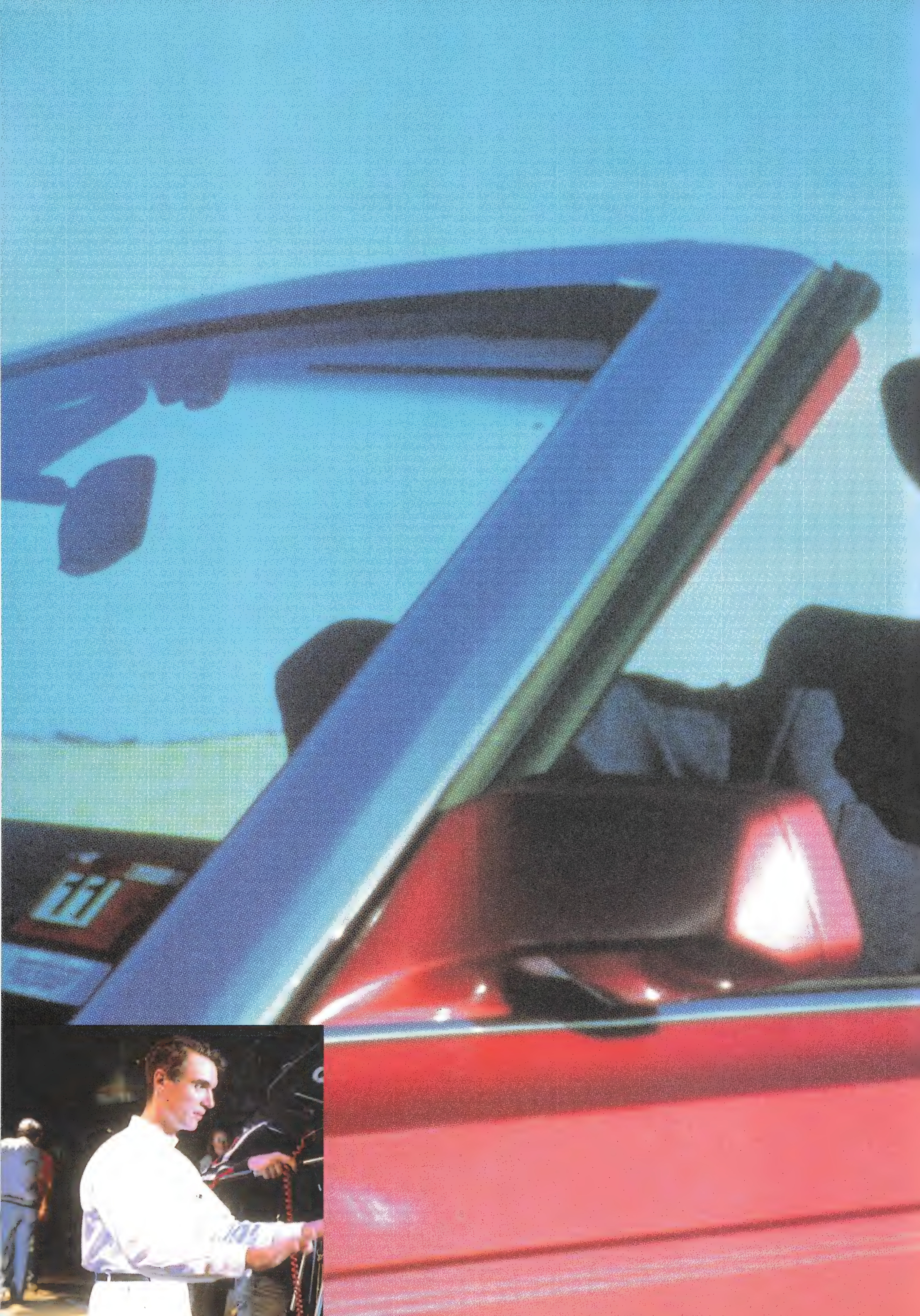


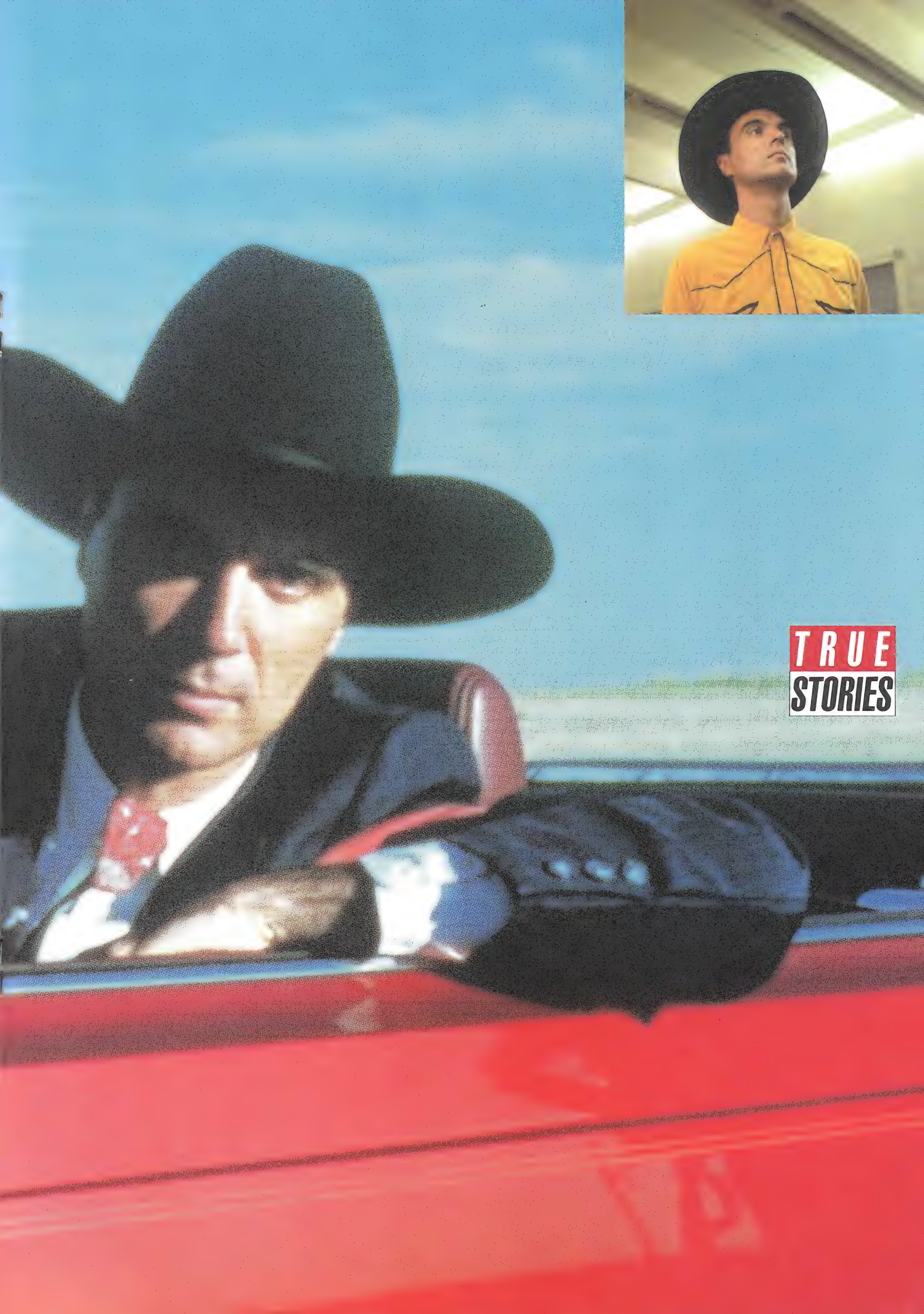
ジョン・イングル●牧師

オクラホマに生まれ、15歳の時にカリフォルニアに移った。オキシデンタル大学の演劇科を卒業後、30年にわたってビヴァリーヒルズとハリウッドの高校で演劇を教えるかたわら、自らの技を磨いた。スウォジー・カーツは彼の教え子だ。学校を退職した彼は、本格的に演技に取りくみ、映画"Stitches"やテレビに出演し始める。また全国スポットの CM にも数多く登場し、おなじみの顔になっている。

マシュー・ポセイ●コンピュータ・ガイ

テキサス州ルボックに育ち、テキサス・テック大学に進む。卒業後、ヒューストンのアレー・シアターでの一年間の修業をへて、ダラスの舞台に立つ。彼にとって三本目のこの映画に出演するまでは、地方の役者にすぎなかったが、ダラス地区では自分の演劇プロダクション〝On The Edge〟を持ち、アンダーグラウンドの芝居に貢献している。




TRUE
STORIES

IMPROVISATION

デイヴィッド・バーンのアメリカ文化論

中村とうよう（音楽評論家）



テックス・メックスを代表するミュージシャン、スティーヴ・ジョーダン。

この映画は、デイヴィッド・バーンの書いたアメリカ文化論ではないかと思う。

愛に飢えるさびしいアメリカ人たち。でもそんなアメリカ人が生きてゆける唯一の支えは、アメリカの多民族性でありアメリカ文化の雑種性である——バーンはこう言おうとしているように、ぼくには思える。

アメリカは多民族国家、雑種文化国家だから単一民族の日本のほうが有利だ、などと発言した中曽根首相は、この映画をぜひ見るべきだ。

映画の舞台として選ばれたのは、テキサスである。冒頭に、古い白黒写真を編集してテキサスの歴史が紹介される。かつてインディアンが住み、彼らの言葉で「友達」を意味する単語からテキサスの名が生まれた。それから、スペイン人が植民し、メキシコの一部となり、アメリカが奪い取ったこの土地に、アフリカから来た黒人たちも住むようになる。テキサスの音楽といえば、われわれはカントリー・アンド・ウェスタンをすぐに思い出す。この映画の主人公ルイスもカントリーが大好きだ。しかしメキシコ系の音楽（テックス・メックス）も盛んである。

音楽界の動きに敏感な人なら、テキサス州サンアントニオを中心とするメキシコ系の音楽が、最近ますますおもしろくなっていることを知っているはずだ。日本ではまだ全然レコードは出ていないが、いま一部で熱い注目を浴びているテックス・メックスのニュー・ウェイヴが、ブレイヴ・コンボとこの映画にも出て来るスティーヴ・ジョーダンなのである。海賊みたいなアイパッチをした人相の悪いアコーディオン弾きスティーヴ・ジョーダンは、妙にクールで前衛的なテックス・メックス音楽をやる。こういう男を映画にひっぱり出したのは、さすがデイヴィッド・バーンだ。なおバーンたちトーキング・ヘッズがアルバム「トゥルー・ストーリーズ」で、映画の中でラモーンが歌う「レイディオ・ヘッド」をやっていて、スティーヴ・ジョーダンがゲストとして加わりアコを弾いていた。ついでに言いうと、このアルバムでぼくのいちばん好きだった「ヘイ・ナウ」という曲は、映画では真ん中あたりで団地建築現場で子供たちが歌っている。サルサ映画『アワ・ラテン・シング』のオープニングのところを思い出させる。楽しいシーンだ。

スティーヴ・ジョーダンのテックス・メックスもさることながら、バーンの雑種文化観を示すものとして最も重要なのは、ミスター・タッカーの祭壇である。ぼくの大好きなゴスペル・グループ、ザ・ステイプル・シンガーズのリーダーであるパップス・ステイプルがその役を務めている。彼の祭壇は、ラテン・アメリカの黒人社会でよく見られるような、カソリックとアフリカの信仰とがゴチャ混ぜになったもの（シンクレティズム）で、ルイスの結婚願望と晴の舞台でうまく歌えるようにという願いをかなえるため、ミスター・タッカーはパパ・レグバに加持祈禱する。

レグバの出自は西アフリカのダオメー南部のヨルバ文化である。それが奴隷船に乗って新大陸に伝来され、ハイチやニューオーリンズではレグバ、キューバではエレグワ、ブラジルではエシューと呼ばれている。造物主の末っ子、入口と十字路を司り、トリックスター的要素の強い神さまだ。アフロ系の密教では病気治癒でも何でもまずレグバに祈る。入口の神の許しがないと病気の神も通れないからだ。

カントリー音楽を愛する白人でハイテク工場の無菌室のコンピュータ技師であるルイスが、自叙伝のような歌を見事に歌ってのけ、結婚相手を獲得するには、原始的な迷信としか見えないアフリカの神さまの助けが必要だった。白人の説教師がアメリカの政治を告発するシーンも黒人教会のゴスペル・ソングの形を借りている。バーンのアメリカ文化観はここにはっきり表れていると言えるだろう。



STORY

作りものではない。現実の生活だ。

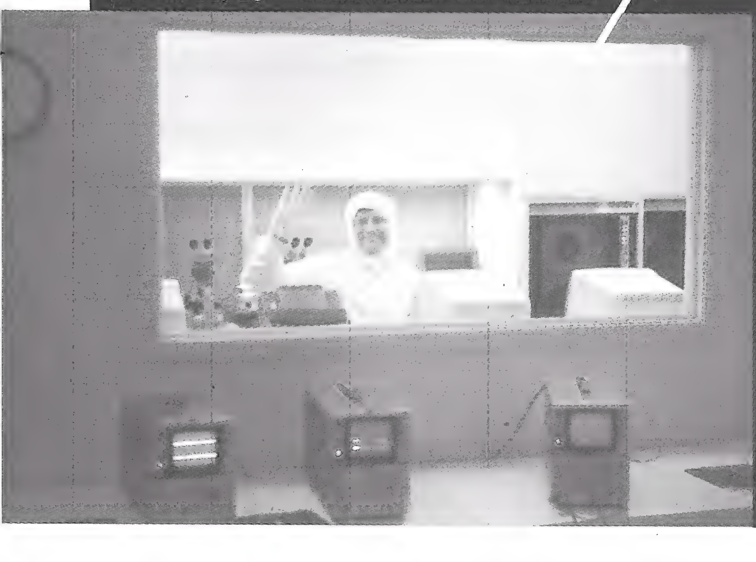


正体不明のカウボーイ・スタイルの男。彼が、この映画のナレーターである。'85年型の赤のクライスラー〝ル・バロン〟コンバーティブルに乗って、ヴァージルを案内してくれる。さて、この町はどんな所なのであろう。

コンピュータ工場。技術の粋を集めたこの工場には、うそつき女、ラモン、かわいい女、コンピュータ男など、クセ者たちが勤務している。今日も今日とて、とりとめのないお喋りに夢中になりながら、仕事をしている彼らであった。



コンピュータ工場の無菌室。技師のルイス・ファインが勤務している。〝踊る熊〟というニックネームを持つ彼には切実な願いがある。そう、ロマンティックな結婚を夢みているのだ。体は大きいが、繊細な心を持った好漢なのである。



世界でいちばん怠け者の女性、それが彼女である。金持ちの家庭に生まれた彼女は、病気でもないのに、決してベッドから抜けだそうとしない。いろいろな機械に囲まれて、横になったまま生活しているのだ。彼女と外界を結ぶものは、テレビだけである。テレビに悪口を言うことが日課となっている。



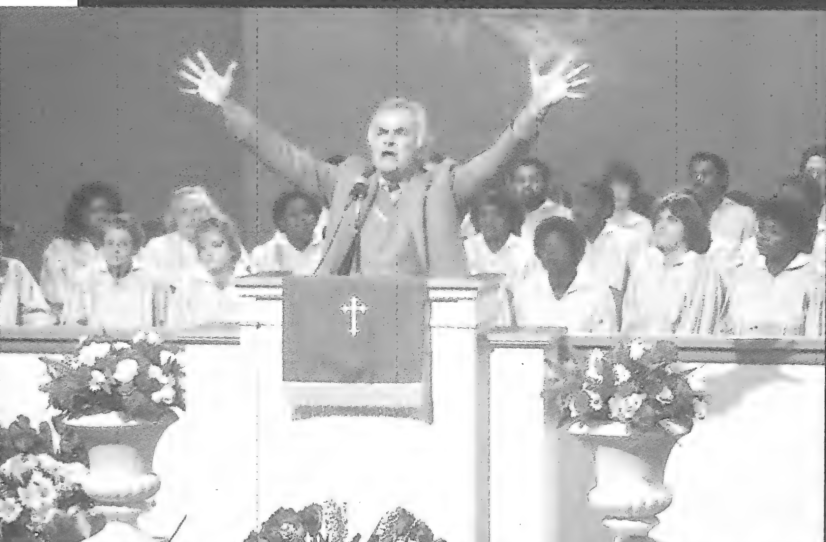
マンモス・ショッピングセンター。衣服にたいへん気を使っているルイスはファッション・ショーに出かける。ショーの司会はケイ・カルヴァー。ブロック壁柄のスーツ、草で作られたスーツと靴、実物大ウエディング・ドレス・ケーキなどに身をつつんだ、モデルたちが次々と登場する。ショーは大成功に終わるかと思われたが……。







町の実力者アール・カルヴァーの家。夕食に招かれたナレーターは、そこで奇妙な発見をする。幸せそうに見えるこの一家には、大きな欠点があったのだ。ここ３年アールとケイのカルヴァー夫妻は、直接言葉を交していないのである。子供たちが、パイプ役となって、家族の会話が成立しているのだった。



教会。牧師が説教を始める。新約聖書の黙示録にでてくる"fire and brimestone"である。しだいに興奮してきた彼は、様々なものに怒りをぶつけ始め、はてはトイレットペーパーにまで話はおよぶ。

かわいい女の家。ルイスが訪れている。彼女の気を引こうと必死の彼。彼女にせがまれて、150年祭の夜のショーで披露する予定の曲を歌い始める。心をこめて歌いあげるのだが、彼女の反応は……。







いよいよ150年祭の幕は開いた。町は活気にあふれている。沿道はパレードを待つ人々でいっぱいだ。アール・カルヴァーの挨拶を合図にパレードが始まった。アコーディオン・バンド、乳母車の行進、草刈機と雑草抜機の部隊、ミニチュア・ムスタングの軍団など、風変りなパレードが続く。

夜、ショーのステージ。投げなわ名人の腕自慢、チアーリーダーたちの華やかな演技、老人クラブのダンスなど、プログラムは進む。そして、いよいよルイスの登場だ。結婚して幸せになりたい、そんな気持ちをこめて熱唱する。はたして、ルイスの心をうけとめてくれる女性は、現れるのであろうか……。





バーンと私の、ザ・交遊録。

デイヴィッド・バーンと知り合って4年くらいになります。私の友人アデル・ボニー・ラッツ(現在デイヴィッドの恋人)の紹介で出会ったわけですが、あの時のことを今でもよくおぼえています。ちょうど彼がトーキング・ヘッズのコンサートで東京に来ていた時に六本木の私のアパートで会いました。

彼も私もどちらかというと人見知りするほうで無言のまま……。ボニー1人が2人を喋らせようと笑顔をふりまいていました。そして私の最初の一言が「昨日のコンサートの音響はひどかったね」でした。ボニーはハラハラ、ドキドキ。ところがデイヴィッドは「実は僕もすごく気になっていたんだ、明日のコンサートはきっと良くなっているから是非もう一度、聞きに来ないかい」と言ったのがつき合いの始まりでした。

当時、私はいろいろな形式のアート(?)に興味があって、音楽についてもたくさんのレコードを聞いていました。もちろんトーキング・ヘッズも大好きでアルバムは全部持っていました。必然的に話は音楽にうつり、私の持っているいろんなレコードをひっぱりだして彼の知らないグループを聞かせたり、彼は私の知らないユーゴスラビアや南米の民俗音楽を聞かせてくれたりで、話は盛り上がり意気投合したのです。

今度、映画を見ていて嬉しかったのは『トゥルー・ストーリー』のオープニングとエンディングの印象的なシーンにデイヴィッドがメレディス・モンクを起用していたことです。

彼女は私が特に興味を持っているアーティストの1人で、4年前のあの時デイヴィッドに、彼女と何か一緒に「仕事」をしてみればと言ったのがきっかけでした。

デイヴィッドとボニー2人は東京に来ると私のアパートに泊まっていますが、お互い忙しいこともあって一緒に遊びに行くことはあまりないですね。人間の生活のベーシックな部分に興味を持つ私とは対象的に、彼は探求心が強く、外に出かけていって珍しい出来事を見つけたり、音楽だけにとどまらずいろんな分野に興味を持つ才能ある人だと思います。

今日初めて『トゥルー・ストーリー』を見ましたが、私の行ったことのないテキサスの青い空がとても印象的でした。映画というの↙

TALKING SESSION TAKE 1

ヨーガン・レール(デザイナー)

↙は基本的にそうですが、誰かの目を通して物を見るということを今回すごく面白く感じました。

デイヴィッドの目を通して見た「アメリカ」(テキサス)がとても面白いですね。こんなシーンも、こんな人々も「テキサス」の一部分なんだよ、と言っているデイヴィッドの温かい「目」を感じました。そして映画としても大変面白いと思います。

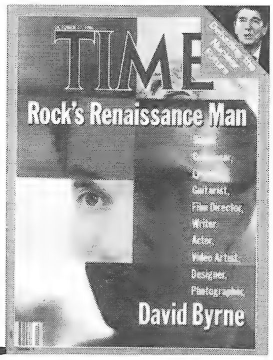


この1月、東京に来ていた時、彼とボニーと私の3人で初めて小さな旅行をして、彼の新作映画のための取材を兼ねて越後湯沢に行きました。雪のシーンがどうしても必要で東京から近くという条件が、湯沢になったわけですが、雪の中をあちこち車でロケハンをして回りました。何日もかけて毎朝早くから描き続けた絵コンテも出来上がり、ロケハンも終り、彼の頭の中ではほとんど映画は出来上がっていたようですが、残念なことにスポンサーとの折り合いがつかず、この企画は流れてしまいました。彼には本当に残念だったと思います。

デイヴィッドは、かつて私が「ヒカシュー」と一緒にショーのオリジナルのサウンドをレコーディングしている時、手伝ってくれたことがありますが、逆に私が彼の仕事を手伝ったことはまだありません。もし機会があれば一緒に「仕事」をしてみたいと思います。(談)

3月11日　銀座にて

『トゥルー・ストーリー』に関する、ほんとのハナシ。



'86年10月、タイム誌はバーンの特集を組んだ。表紙はもちろん彼だ。

コトの起り。

1983年、〝ストップ・メイキング・センス〟の全米ツアーの真最中、デヴィッド・バーンはタブロイド版の新聞から、気にいった記事を切り抜き始めた。映画『トゥルー・ストーリー』のための準備が始まったのだ。テレビや人の話にも耳をかたむけ、オモシロい話を集め続けた。ネタはたくさん集まった。

機は熟した。

そして'84年、バーンは実話を基にひとつの町で起りそうな事件をスケッチにおこした。テーマを具現化するために、彼は何人かの登場人物にキュート・ウーマン、コンピュータ・ガイなどというその人を要約する簡単な名称もつけた。が、この段階では、まだストーリーがなかった。「映画は音と映像の組み合せで、ストーリーは観客の注意をそらさないためのテクニックである」というコンセプトを持つ彼は、脚本家ベス・ヘンリー、ステファン・トボロウスキーの２人に協力を依頼し、物語になりすぎないように、脚本を仕上げていった。

またバーンは、脚本と同時進行で、サウンド・トラックの大半の曲を書いた。これらの曲は、まず'85年にトーキング・ヘッズのオリジナル・アルバムとして録音された。

万事順調であったが、製作費に関しては、彼も並の監督たちと同じように苦労した。金策のためにハリウッドに出掛けたりしたが、結局、500万ドル以内という条件で、彼のレコード会社が資金を出すことになった。

いざテキサスへ。

次に舞台を探すためのロケハンに出発した。ロスアンジェルスやニューヨークは予算に無理があるために、テキサスという土地を選んだのだが、実際にテキサスを見た時、この場所しかない、という確信をバーンは得た。架空の町ヴァージルが、彼の頭の中でイキイキと活動を始めたのだ。登場人物や家々を際立たせるために、超自然なイメージを持つ、苛酷な景観を求め、摂氏38度の猛暑の中、２人の脚本家と共に精力的にテキサスを回った。そして、ロケ地はダラスの北30マイルに位置するテキサス州マッキネイに決まった。

役者も揃った。

キャスティングは'85年の夏、ニューヨークとロスアンジェルス、ダラスで行われた。匿名性を重んじた彼は、できるだけ顔の知られていない役者たちを選んだ。撮影に先立ち、キャストたちは、ダラスで２週間におよぶリハーサルを行った。また、映画のクライマックスである150年祭のために、130名を超える変わったタレントたちが集められた。そのメンバーはディスコ・ダンサー、ヨーデラー、40人の老年者市民によるダンス・グループから、世界的に有名なライン・ダンス・チームにまで及んだ。

撮影が始まった。

'85年９月、撮影はスタートし、６週間が費やされた。彼は、いかに映像にストーリーを語らせるかに心をくだいた。特にパレードを撮るために、ダラス＝フォート・ウォース地区や周辺の町の休日パレードを写真やビデオに撮りまくって研究した。実際のパレード撮影は、本当に開催された先住メキシコ人たちの独立記念パレードに、バーンたちが参加する格好で行われた。

サウンド・トラックの録音もテキサスで実施され、出演俳優たちやテキサスの音楽家たちが参加した。



パリ、テキサス、そして東京。

TALKING SESSION TAKE 2



大貫妙子（ミュージシャン）
インタビュアー／西村幸祐（コピーライター）

デヴィッド・バーンのこと。

西村：どうも、久し振りです。トーキング・ヘッズは好きだと思うんですけど……。

大貫：ええ、すごく好きで、この映画も面白かった。前の『ストップ・メイキング・センス』が大好きだったから。この前、東京でデヴィッド・バーンを見かけたんですよ。あれっ、何でこんな所にいるのかなあ、なんて思ったら、ショッピングの真最中。有名人特有の臭いというの、全然感じないの。ハデじゃなくて、でも、おシャレなんですよね。この映画でかぶってた帽子、可愛かった（笑）。

西村：ところで、デヴィッド・バーンは1952年生まれで、ほとんど同世代っていう感じでしょ。

大貫：そうですね。でも、私よりもっと上かと思ってた。外人は大人だから（笑）。何て言うのかな、日本はなかなか大人の音楽を受け入れる土壌がないから、彼のようなミュージシャンとしてのあり方は、ウラヤマシイ。

トゥルー・ストーリー、映像、音。

大貫：この映画でも思ったけれど、デヴィッド・バーンってちょっと妙な感じがする。でも彼って実は誰よりもノーマルな人間なのではないのかな。たまに電車に乗ると、何か……変わった人が増えたという印象を受ける。この映画は登場してくる人たちが、特に変わっているというよりは、日常的な感じがしました。

西村：そのヘンな人っていうのが、この映画のヴァージルの住民たちなのかな。

大貫：でも彼らはちゃんとヘン（スタイル）を見つけ、実行している。自分のペースを見つけられないことのほうが、いまでは苦痛なのではないかしら。だから、何か電車の中でも、ブツブツ独り言を言ってる人たちが増えた。何がノーマルかというのは難しいけれど。

西村：そうですね。それと、この映画では映像と音の関係という点でも興味がありますね。プロモーションビデオと映画とでは、創りかたが違うというか。

大貫：おととし創った「動物パズル」というビデオの時は映像は全然見ていない。羽仁未央さんと一緒にアフリカに行って同じ空気を吸って、私は音楽で表現し、彼女は映像で表現し、それを最終的に合わせたんです。この前、角川映画（『恋人たちの時刻』）の主題歌をつくった時は、ラッシュを見てから音づくりをしたんだけど、私の場合はスピリットだけを共有して別々に創ったものを合わせるほうがいいような気がします。

西村：ところで、デヴィッド・バーンの音も大貫妙子の音も最近どんどんシンプルになっていると思うんだけど。

大貫：情報にしろモノにしろ、色んなものが飽和している時代だから、私個人的には余分なものをそぎ落したいと思ってる。着飾り過ぎていると、伝わりにくいと思う。〈いさぎよい〉ものが好きになってきたんです。初めから「これです」っていう感じで提出するのが疲れないから。

パリ、テキサス、東京。

大貫：この映画のヴァージルという架空の町は、いかにもありそうで、そこが面白い。

西村：『パリ、テキサス』という映画があったでしょ。

大貫：あれは見逃したんだけど、守るものがない人と守らなければいけないものがある人とでは、大きな違いがありますね。

西村：そして、大貫さんは東京にいるわけだけど……。

大貫：どうなってしまうんでしょう。古いものはこわすし、町名は変わってしまうし、とても残念です。東京というのは、そういう宿命を持った都市、という気もします。

西村：ところで、映画創りはどうですか。

大貫：う〜ん、やっぱりモノやヒトにすごく興味がないと創れないと思うし、私みたいにあっさりしてるとダメだと思います。デヴィッド・バーンは一見そうは見えないけど、これだけのものを撮るんだから、やっぱりシツコクって、粘り強い人なんだなあ、と思います（笑）。

西村：この映画、また観たいですね。

大貫：はい。





TRUE
STORIES





SOUND FROM TRUE STORIES

SIDE ONE
COCKTAIL DESPERADO
ROAD SONG
FREEWAY SON
BROWNIE'S THEME
MALL MUZAK
DINNER MUSIC

SIDE TWO
DISCO HITS!
CITY OF STEEL
LOVE THEME FROM TRUE STORIES
FESTA PARA UM REI NEGRO
BUSTER'S THEME
SOY DE TEJAS
I ♡ METAL BUILDINGS
GLASS OPERATOR

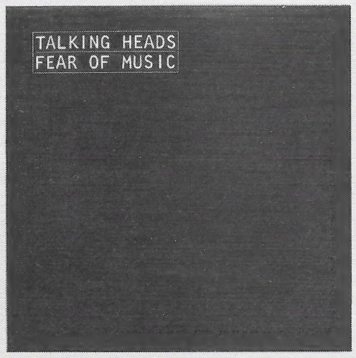


TRUE STORIES : TALKING HEADS

SIDE ONE
LOVE FOR SALE
PUZZLIN' EVIDENCE
HEY NOW
PAPA LEGBA

SIDE TWO
WILD WILD LIFE
RADIO HEAD
DREAM OPERATOR
PEOPLE LIKE US
CITY OF DREAMS

FEAR OF MUSIC



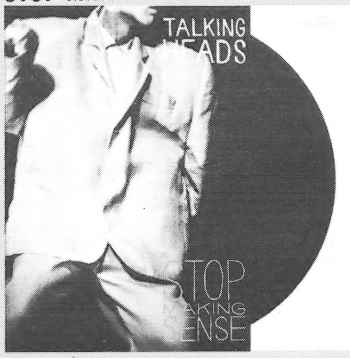
REMAIN IN LIGHT



SPEAKING IN TONGUES



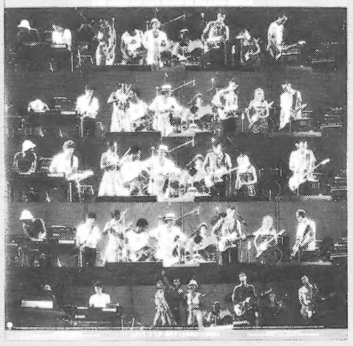
STOP MAKING SENSE



LITTLE CREATURES



THE NAME OF THIS BAND IS THE TALKING HEADS



THE TALKING HEADS DISCOGRAPHIES

CINE SAISON INFORMATION

―― 次回上映 ――

溝の中の月

LA LUNE DANS LE CANIVEAU

1982年/フランス/カラー/シネマスコープ/2時間10分
配給：㈱シネセゾン



解説

ある夜波止場で、女が喉を切られて死んだ。波止場の人足ジェラールの妹であった。最愛の妹を失ったジェラールは犯人を見つけ出そうと、毎晩暗闇の波止場にやってくる。暗い路地、溝の中にしたたり落ちる赤い血の跡に映る月。

波止場のバーには身なりのいい男が飲んだくれている。そして妹を描き愛していた画家がいる。果たして犯人は誰なのか？　ある晩、一人の女がバーにやってくる。息を呑む美しさ――ロレッタだ。だがジェラールとは住む世界があまりに違っていた。彼の住む家の壁に貼られたポスターの"Try Another World"。ロレッタに魅かれたジェラールは、この街を出ていこうとする。やがて、妹殺しの真犯人も明らかになっていくのだが……

フランスの鬼才ベネックスが『ディーバ』に続き発表したサスペンス・スリラー。流麗なカメラワークと繊細な美的感覚で構成された映像の眩暈。

スタッフ
監督/ジャン=ジャック・ベネックス
製作/リズ・ファイヨル
脚本/ジャン=ジャック・ベネックス
　　オリヴィエ・メルゴー
原作/デヴィッド・グーディス
装飾/ヒルトン・マッコーニコ
撮影/フィリップ・ルースロ

キャスト
ジェラール/ジェラール・デパルデュー
ロレッタ/ナスターシャ・キンスキー
ベラ/ヴィクトリア・アブリル
ニュートン・チャニング/ヴィットリオ・メゾジオルノ
フランク/ドミニク・ピノン

銀座テアトル西友

―― 上映案内 ――

カルメン

（1983年/フランス・イタリア）
監督●フランチェスコ・ロージ
主演●プラシド・ドミンゴ/ジュリア・ミゲネス・ジョンソン

メリメの原作、ビゼーのオペラとしてあまりに有名な「カルメン」を、社会派の巨匠フランチェスコ・ロージがついに映画化。当代随一のスタッフ・キャストでおくる、映画を超えた映画、オペラティックシネマ。

シネセゾン渋谷
絶賛上映中
キネカ大森
キネカ錦糸町
4月25日よりロードショー

緑の光線

（1986年/フランス）
監督●エリック・ロメール
1986年ヴェネチア映画祭金獅子賞受賞

夏のパリ。デルフィーヌにはヴァカンスに一緒に出かけるボーイフレンドがいなかった。女友達に誘われてノルマンディーの海に行くが、男の子と知り合うチャンスをつかめない。絶望的な夏休み、でもある日、幸運のしるし〈緑の光線〉に導かれて……

シネ・ヴィヴァン・六本木
ニュー・オープン！
光が丘テアトル西友
両館とも4月25日よりロードショー

CINE SAISON
「トゥルー・ストーリー」

1987年4月18日発行
企画・発行/㈱シネセゾン　〒170 東京都豊島区東池袋3-1-1サンシャイン60 TEL. 03-989-4528～30
発行人/清水俊男
提供/ワーナー・ブラザース映画社
制作/㈱アドス
印刷/㈱ケー・アンド・エス
Ⓒ㈱シネセゾン　1987

TRUE STORIES

CINE SAISON